

北支・ビルマの戦場回顧

愛媛県 垣木 秀雄

昭和二十一年三月頃、仏印のコマイに退り食塩の積み込み作業を仏軍の指示でやらされました。六月、仏印のサンジャク港に退り、米軍の上陸用舟艇に乗せられ、六月十五日、大竹に上陸しました。昭和十七年四月坂出港を出港以来四年二カ月振りに日本本土に帰って来ることができました。翌七月から入隊前の職場に復帰、十月十五日に現在の妻啓子と結婚、三女の親として幸福な生活を送ることができました。

現在は農業に専念しております。今静かに過ぎし日々を思うと、命令とはいえ転属に次ぐ転属と仲間と別れて見知らぬ他の部隊に出されましたが、その基準はどこにあるのか、要は中隊に不要な兵隊の処置なのかと人事を怨んだものですが、しかしその結果が「生」に結びついたのだと逆に考えられる年令となりました。

西日本一の最高峰で四国山脈の主領・石鎚山(一、九八二メートル)並びに天狗岳連山の西端に位置する、標高九八六メートルの高縄山の山麓の菅沢村(現在、松山市菅沢町)に私は誕生しました。

両親の元に、姉一人、弟二人、妹一人の五人兄弟の長男で、七人家族でした。幼少の頃は、全国的に恐慌の嵐が吹き、私の村でも貧しさに立ち向かって、皆さん一生懸命に働いていました。そうした中にも、近隣の人達は人情味は厚く、昔から弘法大師様の教えを順守して、他人様には厚情を施し、自分には厳しいという風習でした。

農家にしましても、自作農はわずかで、大多数の人たちは大地主の田畑を借用耕作でした。世に云う小作人でした。

我が家は父親が(大本家)から独立して一家を構

え、田地三反歩と畑を少々譲り受けての貧しい農家でした。

学業は義務教育を、五明尋常小学校にて卒業しました。父親は将来は「学問を修得せぬと駄目だ」と言って高等科から農学校まで進めと指示されましたが、自分は高等科二年を卒業させて頂き、「これで充分です」と言いました。それに当時高等科へ進学し卒業する者は小学校の中でも半数でした。弟妹のことを思えば、親の苦勞が十分に理解出来ました。

卒業の翌日から、松山の米穀商へ奉公に行きました。その時の約定で、一年分の給金は前渡しで、親が受け取りました。いわゆる前渡金で、「身売り」されたようなことでした。そこで一生懸命に商売に精励し、夜間は青年学校に通学して勉学に励みました。当時青年学校へ陸軍予備役将校(中尉)が来ておりました。

「若人達よ！ 将来を展望せよ。現在は軍縮なるも、近年には大増員する。職業軍人となり、立派

に国家の干城となり、郷土の誇り、誉れとなれ」と説諭されました。

私は、両親に相談しまして、自分は軍人の道を歩むことを決心し、四年間奉公しました上で米穀商に許しを頂いて、役場の兵事係に申し込みました。そして道後の公会堂において、弱冠十九歳で現役兵として志願をしました。

そして見事に徴兵執行官から「垣木秀雄！ 甲種合格」と申し渡され、私は「垣木秀雄・甲種合格、ありがとうございます」と復唱して徴兵検査を完了しました。そして意気揚々と胸を張って帰宅しました。

両親・兄弟・親戚・近隣の方々や幼な友達の皆さんにも祝福されました。出征の前日は、先祖様や氏神様に祈願しました。

晴れて、昭和十(一九三五)年十二月十日入営です。部隊は朝鮮の大邱にある部隊でした。

故郷・松山から盛大なお見送りを受け、その歓呼の声と旗の波には自然に血湧き、肉踊る状態で

した。大邸の歩兵第八連隊・第六中隊へ入隊しました。当時朝鮮は日本内地と同様で、部隊員は西日本全域からの徴集された兵員でした。

初年兵教育は厳格で、中でも志願兵の教育は一層厳格でした。一分一秒の余暇も無しでした。起床喇叭に夢を破られ一日が始まります。点呼に次いで朝食ですが、これも「早飯し・早糞だ」と怒鳴られ、第一期の検閲終了までは死に物狂いで頑張りました。青年学校で修得した事柄がすべて役立ちました。

同期の戦友は五十人で、その内に中等教育終了者三十二人、高等小学校の同学年者は十八人でした。

中隊長より「志願兵は、下士官候補生試験を受験せよ、ただし成績が最優秀で、一番か二番でなくば合格せぬぞ」といわれました。そして分隊長からも推奨されました。自分は当初の目的の軍人を職業にする最短距離にいるのだと一大決心の下に、その夜から、毎夜深夜まで、講堂の側の常夜

同月十六日 支那事変のため大邸兵営出発

同月十七日 鮮満国境(鴨緑江)通過

同月十八日 山海関通過

同月十九日 天津着。

支那方面駐屯軍司令官隷下に入る。

連日連夜、戦闘並びに掃蕩作戦に参加出動しました。天津・張家荘・国家林・南苑方面へは敵を知らずに、ただ闇雲に動けば敵の術中に入るは必ずである。地理を充分把握し、地形、地物を手の中にし、敵情を熟知するため充分に斥候を出して、徹底的に敵を知ることが第一である。しかる後の戦法においても、払暁攻撃、白暮攻撃、夜襲戦法等々、いかに犠牲を少なく、多大な戦果を得るかは、これひとえに上部指揮官の采配にありということでした。

昭和十二年八月一日から九月中旬まで、良郷付近戦闘、九月十五日から泳州・保定の会戦に参加、引続き石家荘方面の戦闘や掃蕩作戦を絶えず遂行

灯の下で、一心不乱に勉強しました。当時、軍縮時代の余波で、進級者には厳しく狭き門でした。

時に陸軍常備兵力は「二十万人」と国際条約で規定されていきましたので、各武官、現役下士官等も、任期半ばでも除隊を命ぜられたような時代でした。

「陸軍武官・服務規定・第二十二条には成績不良なる者は現役満期除隊を命ずる事が出来得る」とありました。自分の知るところでは、先輩達の何人かが途中除隊をして、朝鮮整備警察官に就職してゆきました。自分は「何が何でも軍人として奉公すると、力一杯働いて、奉給を一銭でも多く、家族へ仕送りしてやるのだ」と頑張って頑張って頑張り抜きました。結果は絶えず好転しまして、進級も一線級で、第一番でした。入隊一年半で「伍長勤務上等兵」を命ぜられました。

昭和十二年

七月十二日 応急動員下令

同月十五日 応急動員完結

しました。

大原攻略戦参加では、とくに白家掌北側高地の攻防戦は激烈を極め、一進一退を連日連夜繰り返す大激戦でした。この戦闘中に不覚にも、自分は「左大腿部貫通銃創」の深手を受けました。衛生兵の助力にて、即、平定野戦病院入院、応急手当を施して頂き、石家荘野戦病院から、さらに保定第三兵站病院へと転送され、創傷治療に専念しました。

本病院においてのことで、今・現在も明瞭に頭にあることを申し述べます。従軍看護婦さんが、一人の兵隊さん(失明・聴覚もなし、五感停止、生命はまさに風前の灯火の如しの人)が、両手を中天に突き出して、何かを探し求める様子でした。婦長さんが自分に「何をしてあげたらいいですか」と問う。

自分は言下に「あの兵士は母親を無意識に探し求めているのです」と婦長さんに進言しました。婦長さん即座に白衣の胸を開いて、半死半生の兵

隊さんの頭部を我が胸に包み込まれました。わずか数分か数秒の出来事でした。そして彼は息絶えましたが、その頬にはかすかな頬笑みを感じたものです。「婦長さん、ありがとう」と心より感謝したものです。

私は七十日間入院しました。退院して現隊復帰は昭和十二年十二月二十三日でした。

昭和十三年正月元旦は平穩で、東方の「宮城遥拝」で始まりました。兵営は現地徴発の民家や天幕舎でした。入浴や洗濯は不十分で、非衛生のため害虫の蚤や虱が発生し、その上に南京虫等に苦しめられました。

北支地方は雨天が三日も続くと大地は泥濘化し、道路も膝を没して歩行困難となります。反面、日照りも三日以上になると乾期には黄砂が舞い上がり、眼も口も開けられず、鼻から砂埃りが体内に入る始末でした。まして敵地での戦闘中は少しの気の休まる事も無い状態でした。

昭和十三年二月になって、黄河北の全地域に

出発、復員（凱旋命令発令）することとなりましたが、当時第一番に感じたことは北支地域に参戦し、数多くの軍人軍属、その他の人々が戦没された御霊の安らかなご冥福を祈ることでした。

昭和十五年一月二日に山海関通過、同月四日に鴨緑江渡河、五日には懐かしの大邱の兵営へ凱旋しました。感無量でした。

歩兵とは、徒兵軍人です。支那大陸を、どれほど歩いたでしょうか。そして軍靴を何足、履き潰したでしょうか。今も我が足の裏をじっと眺め、よく頑張ったな……とと思っています。

現役満期除隊者・新期現役入隊者や補充兵の除隊、入隊等の移動があり、自分も平時の通常軍務に服していました。もちろん新兵教育も種々行いました。

昭和十六年七月二十日、臨時編成が下達されました。歩兵第八十連隊補充隊・通信中隊へ編入。八月四日編成完了。同年十月三十一日第二次編成完了。実はこの時点で、上層部には極秘作戦の戦

敵の不穏な動きありとの情報が入りました。大原方面に強力敵現れる、即掃蕩・殲滅・肅清作戦に出陣です。

引続き靈石方面の戦闘にも参加しました。同二月末から、三月十日までは黄河追撃作戦に参加、同六月月末までは占領地の肅清、治安維持に全力を傾注しました。

八月から晋南方面の肅清作戦に参加しました。続いて十一月末頃から黄河河畔における秋季大作戦に参加しました。

明けて昭和十四年正月十四日より、南部（山西軍）の殲滅・掃蕩作戦に出動しました。山西軍は強敵でした。

五月二十五日、第一期肅清作戦に参加しました。六月二十七日、第二期肅清作戦に参加しました。

引続き八月二十五日まで晋東作戦に参加しました。なお、十二月二十七日まで潞安平地の肅清作戦に参加しました。

同年十二月二十八日帰還のため、河北省邯鄲を

略があつたのかと思います。

そして我が連隊に重大命令が発令されました。甲連隊と乙連隊と二分割するという編成替えでした。

甲編成連隊は、第二十師団（秘匿号・朝兵团）

歩兵第八十連隊となりました。この部隊は昭和十七年六月にニューギニア戦線に出陣、激戦の末に玉砕したと知らされました。多くさんの戦友の霊、安らかと祈るものです。

自分は、乙編成組でした。歩兵第百六十八連隊で、第四十九師団（秘匿号・狼兵团）に属しました。

昭和十九年一月六日、編成が完結し、篠山歩兵第七十連隊よりの増強兵力も統合され、堂々たる精鋭連隊の編成が完結しました。

部隊長は徳島県出身の歩兵大佐です。また自分には「陸軍省令・第五十一号により現役兵勤務延長許可」が出ていました。

昭和十九年八月、南方戦線出動命令が下りまし

た。釜山で乗船、門司港に全船舶が集結しました。輸送船二十三隻、護衛艦は海防艦二隻でした。南方戦線危うしでの出発で覚悟は決めておりました。そして大海原を毎日毎日南下しました。船上生活三十日で昭南島へ着きました。その後マレー半島のラシオに上陸し、ここから中国の雲南省へと進軍しました。

これは長距離の難行軍でした。作戦名称は有名な「断・作戦」でした。ちなみに当時、中国の蒋介石正規軍は「米・英・蘭・豪・印」の諸国から莫大な援護物資を受けて輸送道路「援蔣ルート」がビルマのラシオから中国雲南省へと延々と続き、これは立派な二車線の舗装道路でしたが、これを遮断する作戦でした。

我が部隊は、ビルマ方面軍（森集団）の隷下に入りました。モールメンからメークテラと南ビルマから北部ビルマへと進軍し、さらにマンダレーからラシオへと進みました。

作戦は雲南省へのこの「援蔣ルート」を遮断し、

では輸血も出来ず、出血多量で「貧血死も多い」と軍医さんが言っていました。

さらにビルマ戦線では食料と弾薬の補給が途絶したために、皇軍戦士は戦闘以外に多く倒れたのです。

気力がいかに充実していても、食する糧が無くなれば自然に意気消耗です。軍人精神充溢の若い軍人でも、まるで老衰者のごとくなり、朽木の倒れるごとくでした。

全ビルマ戦線においては、火砲による戦死より、餓えによる飢死・戦病・戦傷死者の数が上でした。まるで現世の地獄絵図を眼前にした様子でした。我が部隊も戦後、引き揚げ当時は五十人ほどでした。

昭和二十年八月末頃に終戦を知りました。英軍による武装解除が行われ、レンバン島に移送され、捕虜にさせられました。

昭和二十一年五月三十日、復員船は、日本海軍の元航空母艦でした。今は見る影も哀れな復員船

さらにミートキーナの孤立している守備部隊の救出作戦でした。即ち敵軍の重包囲網を切断、突破しての救出作戦です。これは重大な犠牲を払っての任務で、ミートキーナまで二カ月余り、人跡未踏のジャングルや湿地帯を突破するという筆舌に尽することのできない進軍でした。

昭和二十年三月二日、メークテラ付近で優秀な敵軍と遭遇戦となった時のことです。至近距離に現れた敵戦車が一斉射撃で我が軍の行く手を塞ぎました。自分の隣にいた部隊長が「突撃だ！」と命令を下されました。とその声の消えぬ間に一発の敵弾が部隊長を直撃しました。五体は一瞬にして飛散しました。一片の肉片もなしでした。

偶然、自分の眼前に軍服が飛んできました。襟に付いている「大佐の襟章」を手に取り、せめてもの遺品として胸ポケットに納めましたが、後日捕虜時に紛失しました。また本戦闘の折、自分も鉄帽が破れ、戦車砲弾による破片創を頭部に受けました。頭部の切り傷は非常に出血が多く、戦線

です。艦名は「ホウシヨ」でした。そして昭和二十一年六月五日、大竹湾へ入港、上陸、復員しました。自分の軍人生活に対して

- 一 勲等功級
 - 一 瑞 八等 昭和十五年三月三日
 - 一 功 六級 昭和十五年四月二十九日
 - 一 旭 七等 昭和十五年四月二十九日
- などを拝受致しました。

なお、昭和十年入隊以来、国家から頂戴した奉給は、できる限り両親へ送金しました。親も私の心をくみ取って、農家の生命は「土地だ」と少しでも耕地を拡大してくれていました。そして復員、生還の喜びを力に「大農計画」を目標に農耕に汗を流し、現在、蜜柑畑百六十アール、葡萄畑七アールを耕作しています。

農耕の休憩時に、北支戦線にて没した戦友、ビルマで散華した多くの戦友、そうした哀しく悲惨な戦争を二度と無きことを心に念じながら、老骨に鞭打って、今日も生きてます。